

聞名仏教

第 173 号 毎月発行
(発行日) 2024 年 2 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

仏の仕事と盗む 佐々木蓮磨

痛すべからず」「世話すべし、悩むべからず」と、自分にも言い聞かせ、また人にもすすめ、おられます。心配とは

あるとき、清沢満之先生のところへ一人の同志が訪ねてきて「先生！私はある問題で非常に苦悶しておりますが、どうすれば、この苦悶を打ち消すことができるでしょうか」と、先生曰く「すべて窃盗するものは、表面いかに平気を粧よそおうても心中には必ず苦悶があるものです。あなたは窃盗をしたから、苦しんでいるのです。はやく窃盗を止めなさい」と。

今この同志は、どうも先生の言葉が納得できないので、「私にはありません」と答えると、先生は即座に「あなたは人の物を盗んだことではないであろうが、如来の仕事を盗んでいるから苦しむのである。如来の仕事は、如来に返しなさい。そしてあなたは、あなたに与えられた分限内の仕事をやっておれば、何も苦しむことはないはずである」と諭されたのですが、まことに適切な

親鸞聖人の教えは、見方によくと人間能力の分限分際を明らかにし、分限外の事は、すべて如来の他力に一任して手を出さず、分限内のことに全力をそそいで努力するということに行き方のように窺うかがいます。「計らいをすてよ」と仰せられることも、「自力をすてよ」と仰せられることも、人間の計らいや自力を全部すてよ、と仰せられるのではなく、人間の力以上のことには手を出さず、そこを「自力を捨てよ」との教えをよくいただき、かえって仕事の能率が上がるのではないかと思えます。

合が多いように思います。近ごろはノイローゼ患者が非常に殖ふえてきたというのを聞くのでありますが、これは人間の智慧が進みすぎたために、いらざるところまで計らいの手を伸ばすようになってきたことが大きな原因ではないかと思えます。それで私は、よく人に向かつてノイローゼを治す妙薬は念仏であるということです。

すべし、悩むべからず」と、自分にも言い聞かせ、また人にもすすめ、おられます。心配とは文字が示す通り心にくぼることで、人間は生きていく間は、心にくぼらさずにはおられません。心にくぼる必要はないわけであり、しかし多くの人は、それらを一緒にして、心配即心痛と考えておられますが、これは明らかに区別する必要があります。

すると大抵の人は、不審そうな顔つきで、「ノイローゼを治す薬が念仏であるとは、どういうわけですか」とききますから、私は次のように答えるのです。「ノイローゼは心の焦りや、悩みから起こる病気ですから、念仏することによって、人間能力の分限分際が明らかになって、いらざる計らいをしなくなるから、おのずと人間の苦悩も消えて、ノイローゼが治ることになるのであります」と。

私はよく「心配すべし、心

いるかぎり、しばらくも止められませんが、そのために心を痛める必要はないのであります。心を痛めるといふのは、不可能なところに手を出さず、人間力でできる範囲内で心を配り、世話をしておれば、苦しむ必要はないわけであり、このように、親鸞聖人の教えというものは決して現実ばなれをしたものではなく、むしろ現実生活において精神的苦悩を救い、与えられた能力を十二分に発揮させていただける教えであります。

対話編 『浄土真宗』

19

A 「前回に続き、疑問点を言ってください」

B 「日頃、因果応報ということをよく聞きますが、どう理解すればいいですか」

A 「簡単にいえば、因果応報とは個人の上に於て、善をなせば必ず好ましい結果をもたらさし、悪をなせば必ず好ましくない結果をもたらす、という善因果果・悪因果果の教えです」

B 「この場合の善とは、また悪とは」

A 「善とは他者と自分に安らぎや平安をもたらす行為であり、悪とは逆に他者と自分に苦しみや悩みをもたらす行為です」

B 「具体的にはどのような行為ですか」

A 「仏教でいう十善・十悪などです。十善とは十善をしないことです」

B 「十善とは」

A 「殺生(殺し)・偷盗(ぬ

すみ)・邪淫(不倫)・妄語

(ウソ)・綺語・悪口(粗悪な言葉)・両舌(二枚舌)・

貪欲(むさぼる)・瞋恚(いかる)・邪見などです。綺語

とは自分をかざる虚しい言葉、邪見とは因果を信じないことです」

B 「こうした悪をなせば好ましくない結果が必ず将来

やってくるというのですが、好ましくない結果とは」

A 「一般的によくいわれるのは、悪をなせば貧困や病

気や争いなどいろいろな痛苦を受けるようになり、逆

に善をなせば、健康、金銭的豊かさ・家族の和合など

の安楽をもたらすなどといわれます。こうした善悪の

行為に対する報いとしての苦楽があるというものは、

ある程度の確かさをもったいわれであるといえますよ

う。ただし、厳密に当て嵌まる因果説とはいえません」

B 「確かさに限界があるの

ですね」

A 「ええそうです。何を好ましい結果であり何が好ま

しくない結果であるかは、個人の価値観や感性によっ

ても異なります。ですのでこうした一般的形式的な善

悪の結果が果たして本当にその人にとって安らぎである

か苦痛であるかは一概に決められません」

B 「このような因果応報の考えは厳密なものではない

といえるのですね」

A 「ええ、自然法則のような厳密さのある話ではありません。ただそういっても

デタラメというのではなく、それなりに確かな面があり

有効であるといえます。それは私たちの経験則からでも

ある程度知られます」

B 「経験則とは」

A 「日頃よく見聞きする出来事から考えることです」

B 「例えば」

A 「仕事を怠けると生活に

困り、嘘をつく人と人から信

用されなくなる、生活が荒れてくると病気になるや

すく、怒ることが多いと人から敬遠されるなど。また真

面目に仕事をすると商売がうまくいくとか、しっかり

勉強すると安定した会社に勤めることができるとか、

人に親切していくと困ったときにはまた人から助けて

貰うことが多いなど、このような私たちが日常見聞き

することから、真面目に生きるのとだらしないく生きる

との結果に差ができるなどという経験から、一般的に

因果応報も納得されるという面があります」

B 「こういう因果応報的な教えはいろんな宗教や倫理

でもよく説かれていますね」

A 「ええ、善に励み悪を慎めば、好ましい良い結果が

出てくるといふ教義は、社会の秩序を安定させ、家庭

生活を安定させるというので奨励されているのです。

またこの考えを通して倫理観を養うことにもなりま

しょう」

れる因果応報説は厳密なものではないといふのですね」

A 「ええそうなんです。そしてこのような因果応報

説から人間の現状を説明することはできませんので注

意を要します」

B 「例えば」

A 「悪を為せば苦しみを受けるという結果から、いろ

んな苦しみの原因を考える時、たとえば高熱が出て苦

しいとき、これは過去に私が悪いことをした結果だ

というなら、それは一概にそれは地震や洪水によつて苦し

みに遭ったことが自分の過去の悪のせいであるとは簡

単にいえません。自分に起

こつて来る苦しみや災難はさまざまな縁によつて起

るのであつて、自らの倫理的な悪にのみこれらの原因

を見ることは到底できませんし、逆に楽になつたこと

が過去の自分の善行為の結果だとは簡単にいえません」

B 「自分に起こる苦楽がすべて過去の自分の善悪の行

為にのみ原因があるとはとてもいえないということ

すね」

A 「ええそう思います。ただ自分が為した善悪の行為は必ず苦楽を結果すると仏教では説かれています。けれども結果としての苦楽の原因がすべて自分の過去の善悪の行為の結果だとはいえないのです」

B 「では、因果応報ということでもよく言われる（悪いことをすれば地獄に堕ちる、善いことをすれば極楽に生まれる）というのは、どうなんですか」

A 「これは正確な仏教の教えではありませんが、極めて悪い行いをすると地獄に堕ちる苦を受けるとはいわれています」

B 「極めて悪い行いとは」

A 「たとえば五逆罪を犯すと地獄の果を受けると仏教ではいわれています。それは父母を殺害するとか聖者・賢者に危害を加えるというような罪です。親はこの世で一番恩恵を受けた方ですからそれを殺害することは親の恩に反逆する事であり大きな悪です。また聖賢

は真理を悟り真理を教えてくださいださるお方ですから、このような尊い賢者に危害を加えたり排除したりすると、人の人生も世の中も光を見失って深い闇の中から出られなくなります。ですから、こういう大きな罪を犯すと地獄に堕ちるといわれるのです。また五逆罪を犯さなくても十悪を続けると、これも地獄の結果を生むといわれます」

B 「いつ地獄に堕ちるのですか」

A 「それは死んだ時です。そしてこの世から次にどのような境界に赴くかは、その人の善悪の行い（業）が次の領域に生まれる一番の原因になると説かれています」

B 「では善をなせば極楽に生まれるのですか」

A 「いわゆる凡夫の為す善行では極楽に生まれることはできません。『仏説阿弥陀経』には、

少善根福德の因縁をも

つて、かの国に生まるる

ことを得べからず。

と説かれ、凡夫の為す善は

小さな善根といわれ、こうした善行では極楽浄土には生まれることができないと説かれています」

B 「なぜですか」

A 「凡夫の側からなす善は我執の自我心からなす行いであって純粋な善ではないからです。こうした自我による善では極楽に生まれることはできないのです。なぜなら極楽浄土は純粋で清浄なる領域だからであって、人間の自我心による善行為によって開かれる世界ではないからです」

B 「そうすると私たちは十悪を毎日のように重ねてまですし、自我心のない純粋な善は為しがたいので、極楽には生まれることはできないのですか」

A 「ええそういわれています。そこでそういう衆生をかわいそうだと哀れみをかけて私たちにしたらき、罪深い私たちを全面的に受け取って浄土に生まれさせてくださる本願の力ましまして、それが南無阿弥陀仏となつて私たちにはたらきかけ、喚びかけ、（我にまかせ

よ、助ける）と仰せくださっているのです。この南無阿弥陀仏を聞いて（ああ、私のような無知無能な者を引き受けて下さる）と聞き受ける時、アミダ仏に離れぬ身となり、アミダ仏の本願力によって極楽浄土へと運ばれていくのです」

B 「極楽に生まれることができないのなら、その人はどうなるのですか」

A 「生死流転する、いわゆるまた迷いの世界にへめぐっていくと説かれています」

B 「生まれ変わり死に変わるといふ流転の原因は人間の善悪の行いに依るのですか」

A 「いいえ、流転の因は無明という迷いの心が原因です。ただ流転する中で、どういふ世界に生まれるかという時、どこに生まれるかはその人の今までの善悪の行いの結果によって次に生まれる境界に違いが出てくるということです」

B 「生まれる世界が違ふというのですが、どのような領域がありますか」

A 「それは苦楽の程度によつて、下は一番苦しい地獄から餓鬼・畜生・修羅・人間・天上などという一応六つの世界が説かれています。この六道の説明は辞書で引いてみてください」

B 「こういう無明を元として善悪の行いによつて流転していくことは、あなたがそれを分かつて説かれるのですか」

A 「経験していませんので私には分かりません。しかし仏陀の教えとして説かれていることに信賴し、それを受け入れた上で説いているのです。私の知性では、迷いの世界に生まれ変わりに変わるといふことは分かりません。しかしこのことを私は否定しておりません。流転するのが本当なのだろうと素朴に受け入れています」

B 「私自身は（死んだら無になる）と考えていますが、そういう考えでは仏教の教えには入れないのですか」
A 「いいえ、（死んで無になる）という考えを今お持ち

でも、それはそのまま置いて、死んでからではない（今この私は何によって成立しているのか）と問うことはできるでしょう」

B 「そうですね。現在の私の成立根拠を問うことはできません」

A 「今この私の存在は、無数無量の縁に依って成立し、その無数無量のはたらしを統合していうなら無量寿いわばアミダ仏ですから、（死んだら無になる）という考えであつても、今ここで量りなきいのちのアミダ仏によって私たちは生かされていくのです。ですから私はアミダ仏を離れては存在できない、アミダ仏の大いなる大悲のいのちの中に置かれていくと知らされま

す。こうして仏陀の教えは本當なのだなどという信賴が起こつてきます。信賴が起これば、迷つておれば死ぬとまた次の迷いの境界に赴くと説かれていく仏陀の教えもだんだん受け入れることも可能になりました。あるいはこのことを受け入れることができなくても、

アミダ仏に生かされ、アミダ仏に攝取されると、アミダ仏の領域である（無量寿国）というはかりないのちの領域（浄土）に至るということは、自然にうなずけてきますから、仏教の本質をいただいたことになるのです」

B 「それならついていけそうです」

A 「それからもう一つ。過去の善悪の行いがどのような結果するかを知ることには仏・菩薩にしかできないといわれていきますので、私たち凡夫が軽々に人の不幸に對して（これはあの人の過去の罪の報いだ）などというべきではありません。だいたい因果応報説は自分自身の上に聴かせていただくのであつて、他の人の状態を云々するためのものではありません」

B 「因果応報の教えはどこまでも自分の上に聞くべきものなのですね」

A 「ええそうです。仏教で日常生活の上で説かれる善因果・悪因果の教えは、

自分の過去を反省し、未来に向かつて私が何を為すべきかという現在の善悪の行動をどうするかに力点のあつた教えです。そういう点で、因果応報説は仏教の中心の教えではありませんが、日常生活と社会生活を破綻から守るために奨励されてきた教えです」

B 「例えば」

A 「殺生・偷盜・妄語などは、暴力を振るう、盗みをする、詐欺をするなどの悪であり、それは社会生活を乱します。また邪淫は家庭生活を崩壊させ、悪口や綺語や両舌は人間関係を乱します。ですのでこれらの悪は社会を混乱し個人の生活を破綻させてしまいます」

B 「こうした因果応報説は厳密なものではないといわれましたが、では厳密な意味での因果応報は」

A 「仏教の苦樂にたいする根本の因果説は、一般に言われる善悪の因果ではなく、迷悟の因果です。迷えるかぎり苦は起こつて止まず、真理を悟れば真の安樂を得

るといふ説が基本です」

B 「そうすると自分に苦しみが起こつてきたのは、過去に自分が悪を為してきたからと受け取るよりも、自分の迷い心から起こつてきたのだと受け取るのですね」

A 「ええ、自分の過去の悪業からこういふ苦しい結果になつたのだと反省することとは結構ですが、しかし自分の善悪の行いを反省するだけでは根本的な解決にはなりません。それは道徳的反省であつて、善いことですが、苦しみの起こる一番の元から解決しないのです。いつまでも解放されません。そこで仏教では真理に目覚めること、悟ることが一番大事ですよといわれるのです。それによつて真実の安らぎ（涅槃）に至ると説かれていきます」

B 「そこに仏教の教えの中心があるのですね」

A 「ええ、そして真理に気がついていくなら、そこから本當に悪が除かれ善に赴くことに次第になつていくのです」

B 「道徳的に善悪を考え、

反省していくだけでは不徹底なのですね。なぜですか」

A 「凡夫のなす善悪の行いは自我心からの行いが普通です。私たちの自我は我執我愛がこびりついています。ですから善行にも我愛がついてきます。（善を行えば楽な結果が与えられる）と思つて善を為すところには、

なお功利心がはたらいていきます。自分によつて利益になるから善を行おうという打算の心が入りやすいのです。また悪を行うと自分は苦しい目にあうから悪を避けようというところにも我愛の心があります。ですから私たち凡夫は純粹な善を為すことは難しいのです。私たちはそういう我執我愛の混じつた善しか為せないのですが、そういう自我心混じりの善悪を行つている人間生活を送るなかで、善悪による因果応報を超えたまことの真実を求めよといふのが仏の教えです。そしてであつた真実のはたらきから自ずと悪を慎み清らかな善をなす可能性がでてくるのです」

（了）